

東北地方の園芸とその将来

星 野 好 博

(園試盛岡支場)

わが国土が狭く農産物の不足を来し、これを輸入に依存しなければならぬのはやむを得ない。しかしながら生存のための必需物である食糧は自給をはかるべきは論を俟たない。食糧のうちでも新鮮であることを生命とする園芸作物ではその自給は特に重要である。また例えば米は全国一様に生産されているのに対し園芸作物は地方ごとに環境条件に応じてその作目または供給される時期を異にしており、それが全国的に供給されて食生活を豊かにすることに役立っているのが特徴であり、またあるものは外国への輸出にも向けられていることにも注目する必要がある。

東北地方で代表的なものはリンゴである。東北地方はその環境条件がリンゴの栽培に適しており、その栽培面積は43,500ha、生産量は806,800トン(昭40)であり、おのおの全国の66.3%および71.3%を占めている。これは以前は少数人の嗜好品であったのが、一般家庭の食卓上に不可欠のものとして普及しようとする傾向は最近ますます顕著であり、今後の需要の増加は明らかである。この他、モモ、ブドウ、洋梨なども同様であり、オウトウは絶対量は多くないが当地方の栽培面積は全国の73%を占めている。またリンゴはソ連などへの輸出が漸増しており、モモの罐詰などの輸出も知られている。

当地方のそ菜はこれまでもその環境条件を利用して各種のものが市場に供給されてきたが、これには最近2つの傾向が明らかである。その1つは施設利用の栽培によってさらにその供給量および時期を上げようとしていることである。これには関東消費圏での需要の増大と、その近接地域での農地の減少、交通機関の発達などの因子が関係している。その2は東北北半を主とした地域での貯蔵性の高いもの、加工用のものが冷蔵施設、加工工場などを中核として発展しつつある。

しかしこれらの経営も農業人口の減少を主とした最近の社会情勢の急変に対応した変貌、すなわち合理化の必要に迫られてきた。

これをリンゴについて述べると以前には手をかけるほ

ど高価な果実が得られるという観念があり、省力的な技術の滲透は困難であった。しかし多大の労力、時間を必要とした農薬散布はスピードスプレーヤを利用することは相当急速の普及がみられた。しかし現在ではそれさえもさらに能率化が要望され、他の作業部門でも逐次機械および薬剤(摘果剤など)利用によって省力化が進められているが、これらにはまだ研究を要する多くの事項が残されている。またリンゴは品種により、品質によってその価格差が大となるが、常によいものを供給して価格の安定をはかるためには新品種の育成、品種更新および貯蔵の技術さらに流通体制などにおよんで研究改善の必要がある。モモ、オウトウなどについても同様であるが、これらは多量の輸送が行われるようになってその間の腐敗が大きな問題となって来ている。元来人手を要することの少ない栗、クルミなどによる傾斜地利用もこの時代に適したものとして研究奨励されるべきであろう。

次にそ菜の方では保温施設利用の栽培技術それ自体はすでに他の地方でも開発されているが、それを東北の各地域の環境に適合させ、また他の地方からの供給との調整を考慮して、施設の有利な利用体系を樹立するためにはさらに各種の研究が必要であろう。

すべての園芸作物は良質でありなおかつ一定地域から相当の量が毎年恒常的に供給されなければならないが、これは加工用そ菜の場合にはこの点が栽培者にとっても加工業者にとっても特に重要である。この条件の上にさらに省力および生産費を少なくする栽培技術を見出すための努力が払われる必要がある。例えば当地方の加工用トマトでは現在良質のものが得られているが、なおその他各種の面での研究の積重ねが必要である。

以上を要するに東北地方においては果樹は勿論そ菜部門でも商品化流通の方向に大きく進展しようとしている。それには生産販売の組織化と同時にこの事態に即応した技術開発のための研究が切実に要求されていることは明らかである。